

ドクターがいてわたしがいる

自分や家族の健康のことを何でも相談できて、いつだって大きな安心感を与えてくれる、
かかりつけ医＝「iDoctors」。今号で表紙を飾ってくれたファミリーにも、
そんな特別なドクターがいます。そこには、どんな出会いの物語があるのでしょうか。

取材・文／編集部 撮影／松本 岳治 デザイン／遠藤 紅(Concent,Inc.)



症状がなくても通おうと思える
そんな先生に出会えました

伊藤ファミリー

Meets

ファミリークリニックひきふね

梅舟 仰胤 院長

PROFILE

伊藤佐知さん（40歳）、ご主人の司さん、3歳の琉色（るい）くんの3人家族。関西出身の佐知さんは、自身を「義理人情に厚いタイプ」と話し、かかりつけ探して大事にするのもドクターやスタッフの人柄なのだとか。

PROFILE

2017年東京大学大学院医学系研究科博士課程修了後、同大学医学部附属病院消化器内科で多くの内視鏡検査を手がける。開業以来、「曳舟からがんで亡くなる人をゼロに」をモットーに質の高い内視鏡検査を追求する。

”
かかりつけは薬をもらう場所
だと思っていたけれど
健康を守るために頼る場所。
そう気づかされました

伊藤さん



を受ける後押しになった。検査当日は看護師が家族のように付き添い、「寝ている間に終わるから平気よ」と優しく声をかけてくれたことで、不安がちがちだった彼女の心は少しずつほぐれていった。

「ずっと接客業をしていたせいか、流れ作業のような対応だと気になってしまつて。でも先生たちは違った。私の心に向き合ってくれたおかげで、リラックスして検査を受けられました」

検査結果は「異常なし」。ほっとした伊藤さんだが、結果に加えうれしかったのが、「来年も絶対に受けよう」と思えるクリニックと出会えたことだ。悪くならない限り市販薬で済ませることが多かった伊藤さんにとって、症状がないのに受診することは以前なら考えられなかったはず。そんな彼女の気持ちを動かしたのは、ほかでもない梅舟先生だった。

「定期的に検査すれば回避できるはずなのに、がんで亡くなる人が多いことが僕は悔しいんです。だから受け続けてもらえるよう、患者さんが納得するまで検査の必要性をしっかり伝えていきます」

説明を受けた伊藤さんが、さっそく受付で人間ドックの予約をし、夫の司さんにも同院を紹介したのは、先生の熱い思いが伝わったからだろう。「まだ子どもも小さいので、私が元気でないとい。そのため、症状がなくても通うことが大事だと思うようになりました」と話す伊藤さんの顔は晴れやかだ。クリニックは薬をもらう場所ではなく、健康を守るために頼る場所。そう気づかせてくれた梅舟先生のもとに、伊藤さんはこれからも通い続ける。



”
定期的に検査をしていれば
救える命があるからこそ
納得してもらえるまで
検査の必要性を伝えたい

梅舟先生



かかりつけ医はいたほうがいい。そうはいっても、誰もが自信を持って「ここが私のかかりつけ」と言いきれるとは限らない。子どものかかりつけ医にはこだわっても、自分のことになると……という親たちもいるだろう。3歳になる琉色くんを育てる伊藤佐知さんも、「いるようでいなかった」と苦笑いする。もちろん体調が悪ければクリニックを受診することはあったが、伊藤さんにとってクリニックは、薬を処方してもらうための場所。そんな彼女が、初めてかかりつけと呼べるクリニックに出会ったのは、実はつい最近のことだ。

数カ月前からおなかの不調に悩まされ、市販薬を飲んでいたという伊藤さん。徐々に症状は落ち着いたものの、その頃、健康診断で大腸がんが見つかった知人の話を耳にして、不安を拭えないでいた。過去に経験のある大腸内視鏡検査を受けようかと考えたものの、コロナ禍ということもあり躊躇してしまつたという。そんな中、前職の上司から紹介されたのが、『ファミリークリニックひきふね』だった。

「私、もともと怖がりなんです。こんなご時世なのもあって一歩が踏み出せなくて。でも信頼する上司の『ここなら大丈夫』という言葉に励まされて行ってみたら、そのとおりでした」と声を弾ませる。緊張しながら同院を訪れた伊藤さんだったが、院長の梅舟仰胤（ぎょうたね）先生が待合室に顔を出して呼び入れてくれたことで、肩の力が抜けたという。また、受診した時点ではおなかの症状がなかったのに、先生が丁寧に話を聞いてくれたことも検査